

Title	旧陸軍士官予備校成城学校と19世紀末の韓国人留学生：「朝鮮の渋沢栄一」韓相龍を中心に
Sub Title	Seijogakko as a preparatory school for the Japan military academy and Korean students in the late 19th century : focused on Sangyong Han "Shibusawa Eiichi of Chosen"
Author	金, 明洙(Kim, Myungsoo)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2011
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.104, No.3 (2011. 10) ,p.387(35)- 409(57)
JaLC DOI	10.14991/001.20111001-0035
Abstract	本論文では「朝鮮の渋沢栄一」韓相龍の日本留学先にあたる旧陸軍士官予備校成城学校の事例を取り上げ、19世紀の朝鮮人留学生の思想的な影響と帰国後の活動を検討する。当時陸軍参謀本部の宇都宮太郎は朝鮮・清国留学生を担当しており、国権主義から日本盟主論までを視野に入れたアジア主義の持ち主であった。宇都宮の影響を受けた韓相龍は、帰国後も駐韓日本公使館附武官野津鎮武の指導・監督のもとで韓末における日本の朝鮮植民地化政策に協力した。 This study raises the case of Seijogakko, a preparatory school for the Japan Military Academy, as the destination for "Shibusawa Eiichi of Chosen" Sangyong Han's studies in Japan, considering the ideological influence of 19th century Korean foreign students and their activities after returning to their home country. Taro Utsunomiya, the Army's Chief of Staff at the time, was responsible for Korean and Chinese students and held a pan-Asianist perspective that evolved from a national sovereignty principle to a Japan-as-leader theory. Sangyong Han, influenced by Utsunomiya, cooperated with Japanese colonialist policies for Korea during Japan's annexation of Korea after his return, under the instructions and direction of the military attache for the Japanese Embassy in Korea, Shizutake Nozu.
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20111001-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

旧陸軍士官予備校成城学校と 19 世紀末の韓国人留学生—「朝鮮の渋沢栄一」韓相龍を中心に—

Seijogakko as a Preparatory School for the Japan Military Academy and Korean Students in the Late 19th Century —Focused on Sangyong Han "Shibusawa Eiichi of Chosen"—

金 明洙(MyungSoo Kim)

本論文では「朝鮮の渋沢栄一」韓相龍の日本留学先にあたる旧陸軍士官予備校成城学校の事例を取り上げ、19 世紀の朝鮮人留学生の思想的な影響と帰国後の活動を検討する。当時陸軍参謀本部の宇都宮太郎は朝鮮・清国留学生を担当しており、国権主義から日本盟主論までを視野に入れたアジア主義の持ち主であった。宇都宮の影響を受けた韓相龍は、帰国後も駐韓日本公使館附武官野津鎮武の指導・監督のもとで韓末における日本の朝鮮植民地化政策に協力した。

Abstract

This study raises the case of Seijogakko, a preparatory school for the Japan Military Academy, as the destination for “Shibusawa Eiichi of Chosen” Sangyong Han's studies in Japan, considering the ideological influence of 19th century Korean foreign students and their activities after returning to their home country. Taro Utsunomiya, the Army's Chief of Staff at the time, was responsible for Korean and Chinese students and held a pan-Asianist perspective that evolved from a national sovereignty principle to a Japan-as-leader theory. Sangyong Han, influenced by Utsunomiya, cooperated with Japanese colonialist policies for Korea during Japan's annexation of Korea after his return, under the instructions and direction of the military attache for the Japanese Embassy in Korea, Shizutake Nozu.

旧陸軍士官予備校成城学校と 19 世紀末の 韓国人留学生

——「朝鮮の渋沢栄一」韓相龍を中心に——

金 明 洙

（初稿受付 2011 年 8 月 25 日、
査読を経て掲載決定 2011 年 10 月 11 日）

要 旨

本論文では「朝鮮の渋沢栄一」韓相龍の日本留学先にあたる旧陸軍士官予備校成城学校の事例を取り上げ、19 世紀の朝鮮人留学生の思想的な影響と帰国後の活動を検討する。当時陸軍参謀本部の宇都宮太郎は朝鮮・清国留学生を担当しており、国権主義から日本盟主論までを視野に入れたアジア主義の持ち主であった。宇都宮の影響を受けた韓相龍は、帰国後も駐韓日本公使館附武官野津鎮武の指導・監督のもとで韓末における日本の朝鮮植民地化政策に協力した。

キーワード

朝鮮の渋沢栄一、韓相龍、成城学校、宇都宮太郎、アジア主義

はじめに

本論文の課題は、19 世紀末に朝鮮・大韓帝国の有力な海外留学先の 1 つであった成城学校の事例を取り上げ、同校での留学経験が韓国人留学生の帰国後の活動にどのような影響を及ぼしたかを解明することである。当時の成城学校には大韓帝国の軍人をめざした韓国人留学生が多かったが⁽¹⁾、本研究では特に帰国後日本の韓国植民地化政策に協力して韓末（1897～1910）にすでに有力実業家に成長した韓相龍（1880～1947）に焦点を当てることにする。

韓相龍は、1898 年に来日して当時日本で陸軍士官予備校と呼ばれた成城学校に編入・留学し、帰国してからは駐韓日本公使館と密接な関係を持ちながら激動の韓国政界にあって重要な政治交渉に関わった。韓相龍は、1903 年より漢城銀行の経営に参加することによって実業界に身を投じ、韓末には渋沢栄一の第一銀行と韓国統監府の支援を受け、植民地期には朝鮮総督府の庇護のもとで、同

（1） 1897 年 10 月までは「朝鮮」、1897 年 10 月より 1910 年 8 月までは「大韓帝国（＝韓国）」、1910 年 8 月よりは再び「朝鮮」と呼び分ける。

（2） 鈴木健一「陸軍士官学校における韓人生徒の修学について」『アジア教育史研究』13、2004 年、22～40 頁。

銀行を有力な韓国人銀行に育て上げた銀行家として有名である。特に、韓相龍は日本主導の金融機関の設置過程で重要な役割を果たし、漢城共同倉庫会社（1905）・漢城手形組合（1905）・漢城農工銀行（1906）・東洋拓殖会社（1908）・韓国銀行（1909）などに発起人・創立委員・株主として参加した。植民地期に入っても日本帝国主義との協力関係に依存しながら、韓相龍自身も「朝鮮の洪沢栄一」として朝鮮財界のコーディネーターに成長した。日本の朝鮮統治と、それに抵抗する朝鮮民衆の間に立って、その緊張関係を利用しながら自分の価値を高めたことにその成功要因があったのである。

こうしたパターンは韓相龍だけの経験ではなかった。朝鮮商業銀行の頭取として韓相龍とともに朝鮮財界を主導した朴栄喆をはじめ、植民地期に活動した多くの朝鮮人企業家も大きく見てほぼ同じ道を歩んだ。したがって、韓相龍の留学経験と帰国直後の活動を検討することで、いわゆる「親日隷属企業家」の思想的起源を探ることができるだろう⁽³⁾。

筆者が注目したいもう1つの観点がある。韓相龍と朴栄喆をはじめ初期日本留学生の多くが成城学校出身であった点である。その成城学校の出身者たちが、日本による植民地化政策が進んでいた韓末という激動の政治過程で思想的に分化していき、それぞれ「抗日」と「親日」を主導した。韓・朴などが後者にあたり、盧伯麟・柳東説などは前者の領域で有名である⁽⁴⁾。両者は、同じ学校で教育を受けたにもかかわらず、帰国後の歩んだ道はまったく異なったのである。この両者を比較して韓国の近代化に大きな足跡を残した初期日本留学生の思想的な分岐点を解明するためにも、後者に対する研究が等閑視されてはならない。それが本論文で韓相龍に注目する所以である。

1. 官立英語学校への入学と文明開化論の経験

江華島条約（1876）締結後の朝鮮は、日本・欧米列強に対する門戸開放を余儀なくされた。開国・開港と同時に「近代化」への道を歩み始めたのであるが、その後朝鮮国内のさまざまな政治勢力は、その政治的立場及び経済的基盤に規定されて「近代化」の内容・方法・速度をめぐる互いに対立・葛藤を繰り返した。それを最もリアルに示した事件が、壬午軍乱（1882）、甲申政変（1884）、甲午

(3) 日本と朝鮮（韓国）との留学生交流の実態に関する近年の研究も参考されたい。朴賛勝「一八九〇年代後半における官費留学生の渡日留学」『近代交流史と相互認識Ⅰ』（宮嶋博史・金容徳編、慶應義塾大学出版会）、2001年。一方、中国留学生の思想的影響と辛亥革命との関係を描いた、大里浩秋・孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』御茶の水書房、2002年も比較史の観点から参照してほしい。孫安石「アジア人留学の流れ」『東アジア近現代通史②：日露戦争と韓国併合 19世紀末——1900年代』（和田春樹ほか編、2010年）、40～41頁は、アジア人の日本留学に対する概略として一瞥に値する。

(4) 朱耀翰『秋汀 李甲』大成文化社、1964年；朴敏泳ほか『盧伯麟의 生涯와 獨立運動』独立記念館韓国独立運動史研究所、2003年；박종연「春郊 柳東說의 獨立運動과 軍事活動」『韓國民族運動史研究』52、韓國民族運動史学会、2007年など。

農民戦争（1894）、独立協会の活動（1896）、大韓帝国の成立（1897）などであった。こうした激変の時期に青年期を過ごした韓相龍は、朝鮮で胎動し始めた近代教育機関を通して西洋の近代化経験に接した。その契機となったのが1896年に入学した官立外国語学校（英語学校）であった。

甲午改革（1894.7～1896.2）を主導した軍国機務処は、中央官制改革の一環として礼曹を廃し、新たに学務衙門（1895年に学部と改称）を設置することによって、小学校・中学校・師範学校・外国語学校などの近代教育機関を設置・監督するようにした。翌年の1895年2月には、国王・高宗が教育に関する詔勅として「教育立国詔書」を発表し、全国民を対象にした救国教育論・全人教育論・⁽⁵⁾ 实用教育論を近代教育の方向として対内外に闡明した。同年4月からは「教育立国詔書」の理念を実現するために各級学校の官制と規則を制定・公布した。1895年4月16日に韓国最初の教師養成機関である漢城師範学校の官制をはじめ、同年5月10日に外国語学校官制、同年7月19日に小学校令、1899年4月に中学校、同年6月24日に商工学校官制などが相次いで公布された。⁽⁶⁾ その中で外国語学校は通訳官養成を目的とした学校であった。日本だけでなく、米国・英国・ドイツ・ロシア・フランスなど欧米列強との外交通商交渉が頻繁に行われていた当時の外交事情を反映して、通訳官に対する需要が増大したのである。そのため、新教育制度による各種教育機関の中で外国語学校の就職率が群を抜いて高かった。⁽⁷⁾ 表1が示している各外国語学校の設立年度の相違は、韓国の急変する政局と東アジアにおける外交環境の変化を反映している。

英語学校がはじめて登場したのは1894年2月であった。1886年に設立された育英公院が廃止されると、韓治臣（W. du. F. Hutchison）が同校を引き受け「英語学校」として再発足させたのである。⁽⁸⁾ 韓治臣は1893年より海軍武官学校（当時江華島に位置）で英語教育を担当した人物で、1901年7月に死亡するまで英語学校の教師を務めた。系來百士（T. E. Hallifax）は1883年9月より穆麟德（Moellendorff）の後を継いで同文館を3年ほど経営した英国の通信技術者で、韓治臣が育英公院を英語学校に転換する際に参加して1908年5月の満期退職まで同校の副教師を務めた。夫岩敦（R. Frampton）は、韓治臣の後任として英語学校に赴任して1911年に同校が廃止されるまで勤務した。⁽⁹⁾ そうした経緯を持つ英語学校が1895年5月10日に「官立英語学校」に改編されたわけで「外国語学校官制」に基づいた措置であった。⁽¹⁰⁾

韓相龍が官立英語学校に入学したのは1896年7月で、一族である韓昌洙の推薦によるところで

(5) 「教育立国詔書」の教育理念については、李京姫「『教育立国詔書』에 관한 研究」梨花女子大学校教育大学院碩士学位請求論文，1995年，27～49頁。

(6) 李光麟『韓国開化史研究』一潮閣，1982年，134～135頁。

(7) 魯仁華「大韓帝国 時期 官立学校 教育의 性格 研究」梨花女子大学校史学科博士学位論文，1989年，171～179頁。

(8) 李光麟，前掲書（1982），131～132頁；趙文濟「韓末의 英語学校教育의 研究」『論文集』11，서울教育大学校，1978年，31頁。

(9) 趙文濟，前掲論文（1978），31～32頁。

表 1 旧韓末の官立外国語学校

学校名	最初設置	外国人教官	韓国人教官	第 1 回卒業	卒業総回数 (1910 年まで)	卒業生総数 (1910 年まで)
日語学校	漢城	1891 年 5 月	岡倉由三郎 長島巖三郎 田中玄黄	玄樞 崔在益 朴永武 柳済達	1898 年 1 月	本科 11 回 190 人
					1909 年 5 月	速成科 2 回 71 人
	仁川	1895 年 6 月	岩崎厚太郎	李根浩 崔鼎夏 徐丙協	1901 年 6 月	9 回 63 人
	平壤	1907 年 3 月	真藤義雄 太西裕八 樽木末實	趙樂鴻 羅栄坤	1908 年 5 月	2 回 25 人
英語学校	1894 年 2 月	T. E. Hallifax (系來百士) W. du. F. Hutchison (轄治臣) R. Frampton (夫岩敦)	安鳴護 尹泰憲 金佑行 鄭一範	1903 年 2 月	8 回	79 人
法語学校	1895 年 10 月	E. Martel (馬太乙)	李能 安于商 金漢箕	1906 年 1 月	6 回	26 人
俄語学校	1896 年 5 月	Birukoff (米柳羔葡)	韓龜鎬 郭光義	—	—	—
漢語学校	1897 年 5 月	胡文章 杜房域	吳圭信 柳光烈 李命七 崔永年	1901 年 7 月	9 回	59 人
徳語学校	1898 年 9 月	J. Bollighn (仏耶安)	秦秀 崔泰卿 柳王免	1908 年 5 月	3 回	5 人

出典：李光麟『韓国開化史研究』一潮閣、137 頁（韓国語）。

あった。⁽¹¹⁾韓昌洙は、1896 年 7 月 3 日から 1898 年 7 月 2 日まで官立外国語学校の校長を務めており、⁽¹²⁾「外国語学校官制」第 10 条によって当時の学務局長でもあった彼が外国語学校の校長を兼職していたのである。韓昌洙は、「文明開化の先覚者として自他共にこれを許るし、日本の官邊ともよく交は^{ママ}り、時勢もよく辨まへて居た人」⁽¹³⁾であった。昌原監理（1900 年 5 月 16 日に赴任）韓昌洙が「馬山浦事件」でロシアを牽制しようとした日本の立場を支持して、ロシアの土地斡旋要求を拒否したことはよく知られている。「馬山浦事件」とは、1899 年 4 月にロシアが海軍根拠地を求め馬山浦付近の

(10) 趙文済教授の時期区分によれば、官立英語学校時代（1895.5.10～1906.8.31）、官立漢城英語学校時代（1906.9.1～1907.12.31）、官立漢城外国語学校英語部時代（1908.1.1～1911.10.31）に 3 期区分が可能である。趙文済、前掲論文（1978）、22 頁。

買収に着手し、それに対抗して日本の外務大臣・参謀本部・在韓日本公使館・在釜山領事館などが総出動してロシアの動きを阻止した一連の過程を指す。結局、日本政府の指示を受けた釜山の有力商人迫間房太郎が、個人名義で当該土地を買い集めることによってロシアの馬山浦進出を断念させ⁽¹⁴⁾た。馬山浦事件の事例から韓昌洙が早くから日本に傾倒していたことがわかる。

そうした韓昌洙が、最初漢城師範学校を希望した韓相龍に近代教育を行う官立英語学校を勧めたことになる。日本語学校ではなく英語学校に入学させた理由は不明であるが、英語学校がフランス語学校とともに就職率が最も高かった点⁽¹⁵⁾、国際外交舞台で英語が使われていた点、そして母方の伯父李完用が1887年より1890年まで駐米公使館参贊官及び臨時代理公使事務を務めた点、などを考慮したと思われる。また、身分制の影響が強く残っていた当時、従来「中人」の仕事であった通訳官を養成する外国語学校に、名高い両班で名族出身の韓相龍を入学させたのも注目を惹く。⁽¹⁶⁾西洋文

(11) 『官報』第370号、建陽元年7月6日；第994号、光武2年7月6日；魯仁華，前掲論文（1989），140・141頁。韓昌洙の1910年までの経歴は以下の通りである。1862年生まれ，清州韓氏，父は韓末の文章家として有名な韓章錫であった。1898年6月17日付で駐劄英独伊公使館2等参書官（奏任3等）に任ぜられ，約2年間（1899年6月27日再任）海外で過ごした経験がある。また昌原監理兼府尹（1900年5月16日付，5月23日から昌原港裁判所判事を兼任）と中枢院議官（1903年5月27日付）を経て1905年11月14日に務安監理（奏任2等，12月9日から務安港裁判所判事を兼任）を命じられた。1906年には報聘大使完順君李載完を随行して日本政府から勲3等旭日中綬章を拝受した。1907年6月15日の官制改正の際には内閣書記官長に補せられ，同年8月1日には京城博覧会開設の際には同会顧問に委嘱された。また1907年10月に日本皇太子の渡韓の際に奉迎委員を仰せ付けられ，日韓政府より勲2等瑞宝賞と勲2等太極章を拝受した。日韓併合の際には内閣書記官長残務取扱を命じられた。『朝鮮貴族列伝』では韓昌洙を次のように評価していた。「氏は第一次日韓協約以後朴齊純内閣の第一緊客となり，総理朴齊純氏の信頼を被る事極めて厚く，李完用氏の内閣に入っても又重用せられて常に要職に在り氏は，啻に政權の間に非凡の手腕を有するのみならず，その社交術の円熟せる事抜群にして，能く世味を咀嚼す殊に日本の文物制度は素より，その風俗習慣に対しても大なる趣好を有し居常日本食を嗜み，その邸宅の如きも和韓洋を折衷したるものに住せり。」大村友之丞『朝鮮貴族列伝』朝鮮研究会，1910年12月，147～151頁。

(12) 同条には「学校長及書記는学部奏判任官으로支校長及書記는地方官員中으로兼任케함을得함」となっていた。趙文濟「韓末의日語学校教育의研究」『論文集』10，서울教育大学校，1977年，27頁。

(13) 韓翼教編『韓相龍君を語る』韓相龍氏還暦記念会，1941年，29～30頁。

(14) 馬山浦事件については，森山茂徳『近代日韓関係史研究——朝鮮植民地化と国際関係』東京大学出版会，1987年，62～80頁，第2節の「朝鮮土地買収事業——1899-1900年の馬山浦事件を手がかりとして」；大山梓「日露戦争直前における日露関係の一問題——馬山浦事件」『軍事史学』4（3），通巻15号，軍事史学会，1968年11月；金義煥「韓末馬山浦事件攷——露日関係가 港民에 미친影響을中心으로——」『國際政治論叢』第10輯，韓國國際政治学会，1970年12月；金容旭「馬山浦滋福洞・月影洞 및 栗九味の土地事件——露国单独租界를中心으로」『法史学研究』6，韓國法史学会，1981年。

(15) 李光麟，前掲書（1982），144頁。

(16) 英語学校の第5回卒業生（1907.3）として解放後には興業銀行長・財務長官（大臣）などを務めた尹臯炳の回顧によると，彼が在学しているときにもまだ両班と常民の区別すなわち身分意識が強く残っていたという。李光麟，前掲書（1982），143頁；注30。

表 2 官立漢城外国語学校英語部の教科課程（1909）

学年 学科	修身	英語				国語 及び 漢文	数学	歴史 地理	理科	体操	隨意科 (日語)	計
		読解方訳	会話	書取	作文文典							
第一 学年	時数	1	7	2	6	2	1	4	2		3	30
	程度	実践 道德	日常須知 の文学及 び普通文	読方訳解 を準拠す	読方訳解 を準拠す	普通文	講読 作文	四則	本国歴史 本国地理		学校 体操	
第二 学年	時数	1	8	1	6	4	2	3	3	1	3	(2) 32 (2)
	程度	同上	同上	同上	同上	同上及び 初等文典	同上	同上及び 小数	同上 外国地理	博物生理	同上	仮名及び 簡易国語 文
第三 学年	時数	1	7	1	6		2	2	4	1	3	(2) 32 (2)
	程度	同上	同上及び 高等普通 文	同上	同上	書簡文及 び高等文 典	同上	分数及 び比例	同上	物理化学	同上	簡易国文

出典：『官報』第 4512 号，隆熙 3（1909）年 10 月 13 日の学部告示第 14 条により公布されたもの。

物の導入・受容に積極的であった韓昌洙の姿勢をうかがい知ることができよう。

官立英語学校で韓相龍はどのような教育を受けたか。1909 年のものではあるが、英語学校の教科課程を示した表 2 によれば、英語の読本・書き取り・作文・翻訳・会話が中心になっており、1 週間に 1～2 回の漢文・歴史・地理・数学・理科が配置されたことがわかる。そのほかに体操教育が重視されていたことが時数から見て取ることができ、智・徳・体三育論を標榜した「教育立国詔書」の全人教育論に基づいた教科編成であった⁽¹⁷⁾。校長の韓治臣も体育教育に熱心で、彼の主導で外国公使館員などソウル（当時漢城）居住外国人と外国語学校の生徒の間でサッカー試合が行われたこともあった⁽¹⁸⁾。1 年に 1 回は外国語学校全体の運動会も開催した。当時の体操教育は、英語学校は英国の海兵下士が、⁽¹⁹⁾ 俄語学校と法語学校は露国軍人が担当していたため、いずれも軍事訓練に近いもので執銃法まで教えた⁽¹⁹⁾。

また官立外国語学校が創設された 1895 年は、親日内閣により各種改革が行われていた時期でもあり、国王・高宗も断髪令の施行とともに自ら髪を切った。1895 年 4 月からは徐載弼が『独立新聞』を創刊して一般民衆に開化思想を鼓吹しており、1896 年 7 月には独立協会が発足して主権守護と自由民権運動を展開していた。外国語学校の生徒たちもこうした雰囲気の中で髪を切り、西洋式の制

(17) 李京姫，前掲論文（1995），42～43 頁。

(18) William F. Sands (1930) *Undiplomatic Memories*, New York, p. 114（金薫訳『조선의 마지막 날』未完，1986 年，146 頁）。

(19) Isabella L. Bishop(1898) *Korea and Her Neighbours*, Vol.2, pp. 208～209（이인화訳『한국과 그 이웃나라들』살림，1994 年）；*The Korean Repository*, Vol.4, Editorial Department, pp. 235～237，1897 年 6 月刊参照；李光麟，前掲書（1982），145 頁の注 40。

帽・制服の姿で学校に通っていた。⁽²⁰⁾英語学校の生徒の中には、独立協会（会長：尹致昊）及び皇国中央総商会（会長：趙秉式）の主権守護運動とは距離をとっていた学校当局の態度を批判して学校を辞める者もいた。⁽²¹⁾中央総商会は、当時一般民衆に最も影響力を持っていた独立協会と歩調をともにしながら対外的に民族商権守護を主張し、対内的には自強改革内閣樹立を求めている商人団体であった。⁽²²⁾中央総商会は、漢城市内の各市廬を動かして 1898 年 10 月 11 日から撤市を断行したこともあり、それは改革志向の朴定陽過渡内閣が登場する契機となった。⁽²⁴⁾

以上のような社会政治状況の中で韓相龍は官立英語学校で近代教育を受けていた。韓相龍が後に「新式の学問もやり、時代も変って行くのに気付いて漸くのこと思切つて髪を切った」と回顧したように、具体的な内容はともかく、いわゆる文明開化論の受容に積極的な姿勢を示したことは明瞭である。さらに、1896 年より外部大臣を務めていた母方の伯父李完用が独立協会の発足時に事務委員長に就任して会長安駟壽とともに同会を主導し、1898 年 2 月の役員改選では会長に就任した点と、父方の韓昌洙が 1898 年に開かれた独立協会討論会に指定討論者として参加していた点も、日本留学直前の韓相龍の思想形成を検討する上で考慮すべきである。⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾

(20) 李光麟，前掲書（1982），146 頁。

(21) 『独立新聞』1898.10.13，〈激憤退学〉。

(22) 独立協会及び皇国中央総商会の連合活動については、慎鏞厦「19 世紀末の韓国対外貿易の展開と商権問題——独立協会と皇国中央総商会の商権守護運動」『亜細亜研究』17（2），高麗大学校亜細亜問題研究所，1974 年（韓国語）。独立協会については、朱鎮五「19 世紀後半開化改革論の構造と展開——独立協会を中心に」延世大学校史学科博士学位論文，1995 年；慎鏞厦『独立協会研究——独立新聞・独立協会・萬民共同会の思想と運動』一潮閣，1974 年。

(23) 市廬は朝鮮時代の特許商人で国家需要品の調達を担当した。その見返りとしてソウル周辺 10 里以内の同種物品の取扱いを禁止することのできる「禁乱廬権」が与えられた。1791 年の「辛亥通共」によって六矣廬を除いて「禁乱廬権」が廃止され、甲午改革の際に六矣廬の特権も撤廃された。

(24) 慎鏞厦，前掲論文（1974），153 頁。

(25) 韓翼教編，前掲書（1941），32 頁。

(26) 李完用については、韓明根「統監府時期李完用研究」『韓国民族運動史研究』24，韓国民族運動史研究会，2000 年；尹徳漢『李完用評伝』中心，1999 年；林大植「李完用の変身過程と財産蓄積」『歴史批評』22，歴史批評社，1993 年秋；朴永錫「李完用研究——親米・親露・親日派としての行為を中心に」『国史館論叢』32，国史編纂委員会，1992 年（以上韓国語）；木村幹「李完用に見る韓国併合の一側面（1）・（2）」『政治経済史学』通巻 351・352 号，日本政治経済史学研究所，1995 年 9 月・10 月；李淳衡「日韓併合：伊藤博文と李完用を中心として——朝鮮の政治システムについて」富士ゼロックス小林節太郎記念基金 1996 年度研究助成論文，1998 年 3 月など。

(27) 朱鎮五，前掲論文（1995），93 頁。独立協会は、本格的な自主・民権・自強の民族運動を展開するため大規模な民衆大会を組織した。1898 年 3 月 10 日，鐘路で開催した万民共同会には 1 万人余りの民衆が参加してロシアの干渉を糾弾し，ロシアの釜山・絶影島租借要求の撤回，ロシア銀行の撤廃，ロシア財政顧問及び軍事教官の撤収などを主張する討論集会を開いた。そして，外部大臣宛に同討論会の内容をまとめた手紙を送り，軍事及び財政における自主権確保を求めた。このような討論集会は当時の政界に大きな衝撃を与え，政府高官を参加させた官民共同会（1898 年 10 月 29 日）に発展した。

2. 成城学校留学と対日本認識

1898 年 11 月、韓相龍は官立英語学校の副教師でクラスメートでもあった尚灝⁽²⁸⁾とともにアメリカ留学を試みるが、留学資金の不足により途中で計画を変更して日本に留学することになった⁽²⁹⁾。母方の伯父で軍部大臣を務めた李允用の推薦で「陸軍士官予備校」とも呼ばれた成城学校に編入学（1899 年 7 月）するまで、韓相龍は参謀本部第 1 部長宇都宮太郎少佐の監督・保護のもと私塾で勉強した⁽³⁰⁾。当時、宇都宮は成城学校の中国人留学生を担当しており、慶應義塾を卒業する韓国人留学生を対象に軍人志望者を選抜して成城学校に入学させたこともある⁽³¹⁾。慶應義塾→成城学校→陸軍士官学校のルートは大韓帝国の軍人を志望する韓国人留学生が歩むエリートコースであった⁽³²⁾。宇都宮をはじめ通訳官蓮元⁽³³⁾・晴気市三・相良憲太など参謀本部所属軍人の影響もあって韓相龍は軍人を希望したのである⁽³⁴⁾。

(28) 当時韓国政府は医学校・中学校・官立外国語学校の就業率を高めるために、卒業生を当該学校の教官として採用する方針を官報に発表した。すなわち、尚灝は 1898 年 9 月 30 日に卒業生として官立英語学校の副教師として任命されたのである。国史編纂委員会『大韓帝国官員履歴書』探求堂、1972 年、429・556・748・848 頁。

(29) 尚灝は 1894 年 10 月 22 日に官立英語学校に入学して 1898 年 9 月 30 日に卒業した。在学中の 1897 年 6 月には正個試験の優等で銀時計を受賞した。官立英語学校卒業と同時に同校の副教師に選抜され第一班第一座を担当した。1898 年 11 月 4 日に日本に渡航して日本語と算術を修学し、1899 年 9 月 11 日に東京私立工手学校予科に入学して 1900 年 6 月に同予科を卒業した。1900 年 9 月 11 日には東京第一高等学校大学予備科第二部学科（工科大学）に入学して 1903 年 7 月 1 日に卒業した。1903 年 9 月 11 日に東京帝国大学工科大学造船科に入学して 1906 年 7 月 10 日に卒業した。1906 年 10 月に帰朝して農商工部に入り参書官となり、翌年の 1907 年 6 月 20 日には同部の書記官に昇進した。国史編纂委員会、前掲書（1972）、429・556・748・848 頁。

(30) このことについて宇都宮は 1908 年 9 月 14 日の日記に次のように記している。「朝鮮人韓相龍来営す。同人は前宮内大臣李允用の甥にて、李の依頼により数年前其東京留学中世話したることあり。今は漢城銀行取締役兼総務長にて、此度東洋拓殖会社設立に付き其創立委員として来朝せしなり。」『宇都宮太郎日記』I、2007 年、179 頁。

(31) 魚潭の回顧によれば、宇都宮太郎は、1896 年に慶應義塾卒業生のうち軍人希望者を選考するため、齊藤力三郎・伊東主一とともに慶應義塾に来たことがある。西四辻公亮編『魚潭少将回顧録在韓苦心録金亨燮大佐回顧録』高麗書林、1930 年（市川正明編「日韓外交史料」第 10 巻、原書房、1981 年復刻）、6 頁。

(32) 韓末初期における日本留学生の修学課程が必ずしも一定したとはいえないが、最も多く見える類型は次の 2 つであった。1 つは、慶應義塾（普通科）→成城学校→陸軍士官学校→見習→教官で、もう 1 つは、慶應義塾（高等科）→技術学校→見習→教官・技手であった。これは当時韓国の近代化課題が主に「富国強兵」及び「新学問の導入」に置かれたためである。金泳謨『韓末支配層研究』ソウル大学校韓国文化研究所、1972 年、175～176 頁；同『朝鮮支配層研究』一潮閣、1986 年、421・429 頁。

(33) 蓮元は、1908 年 2 月 5 日現在、群山理事庁に属しており、「土地建物の証明申請及び契約書認方に関する一般心得」を作成して日本からの移住者に提供していた。『韓国実業要報』山口県庁内務局、1908 年、48～49 頁。

表 3 成城学校の歴代校長

歴代	氏名	就任	退任	在任	備考
1 代	日高藤吉郎	1885.1	1886.4	1.4	元陸軍下士官，創設者。
2 代	柳生房義	1886.4	1886.7	0.4	陸軍大尉，「自学自習」の校風を打ち出す。学習院転出。
3 代	原田一道	1886.7	1889.1	3.4	陸軍少将，幕末の兵学者でオランダに留学。
4 代	川上操六	1889.11	1899.5	9.7	陸軍参謀本部次長・総長を歴任。1898 年陸軍大将。成城学校校長就任時は陸軍少将。中国人留学生部を創始するなど，成城学校の基礎を構築した。1899 年病没。
5 代	奥山三郎	1899.11	1901.9	1.11	成城学校幹事長，校長に就任。その後理事。
6 代	岡本則録	1901.9	1903.6	1.1	数学者で和算の大家。大阪師範学校長・学習院教頭・陸軍教授を歴任。成城学校教頭後，校長に就任。
7 代	児玉源太郎	1903.6	1906.7	3.2	陸軍大臣・内務大臣・文部大臣を歴任。成城協会長。1906 年病没。
8 代	岡本則録	1906.7	1916.1	10.4	児玉源太郎の急逝による再任。
9 代	沢柳政太郎	1916.1	1927.12	11.3	
10 代	児玉秀雄	1928.2	1946.5	18.3	

出典：『成城学校八十年』成城学校，1965 年，〈歴代校長〉；宮城由美子「成城学校と中国人留学生についての一考察」『佛教大学大学院紀要』第 35 号，2007 年，48 頁の注 10。

備考：在任期間は単位が年である。

(1) 成城学校と韓国人留学生

成城学校は，1885 年に歩兵軍曹出身日高藤吉郎により設立された「文武講習館」を母体とし，1886 年 8 月に成城学校と改称した⁽³⁵⁾。当時の東京には，陸軍士官学校の受験を目的とした学校が成城学校のほかにも温知塾・有斐学校の 2 校があったが，陸軍の希望により成城学校に一元化した。陸軍にとっても陸軍士官学校・幼年学校と密接な関係を持つ予備校が必要とされていたのである。そのため陸軍は成城学校に毎年 1,200 円の補助金（最初の予定は 30 年間）を提供し，宮内省も 1891 年 9 月に現在も使っている牛込原町の校地を下賜した。そうした事情を反映して校長には創設者日高藤吉郎をはじめ多くの軍人が就任した（表 3 参照）。

特に，陸軍の実力者である川上操六が 1889 年より 10 年間にわたって第 4 代校長を務めたが，同期間は韓相龍が成城学校に留学していた時期と重なる。台湾総督と日露戦争時の満洲軍総参謀長を経て 1904 年に陸軍大将となる児玉源太郎も成城学校の第 7 代校長を務めた。いずれも現役時のこと⁽³⁶⁾で成城学校と陸軍の密接な関係を示す。

(34) 韓翼教編，前掲書（1941），37 頁。

(35) 『成城学校百年』には「成城」という校名の由来が記されており，陸軍士官学校との関係がうかがえる。「校名の「成城」は，詩経（大雅篇）にある「哲夫以て城を成す」という言葉からとって，当時の陸軍士官学校長小沢武雄中将が命名した。哲夫とは知徳のすぐれた男子の意で，城は国を表している。すなわち，成城に学ぶ男子は国家を興隆させる者であることを言ったものである。「本校ハ陸軍武学生徒入学ノ予備学科ヲ教授スル所トス」「哲夫成城——校名の由来」『成城学校百年』学校法人成城学校，1985 年，24～25 頁。以下，特記がない限り，成城学校については同書にしたがう。

成城学校の士官予備校としての特徴は、外国語科・体操科の教員配置及び授業内容からもうかがえる。英語・フランス語・ドイツ語からなる成城学校の外国語科は、最初はフランス語とドイツ語の中から選択するようになっていたが、陸軍が軍事政策上ドイツ語とフランス語をともに重視したため、特殊学級として「外国語学班」を編成して3ヵ国語すべてを教授した。そのため、尋常中学の教員45人のうち外国語科教員だけで18人に達しており、18人のうち11人（教授4名、助教授7名）が陸軍から嘱託教員として派遣されていた。体操科の場合は、全教員（5人）が兵式体操科教員の免許状を持っていた。兵式体操科教員とは、陸軍教導団歩兵科を卒業した者をいい、諸学校令に基づいて兵式体操授業が各級学校に義務付けられていた。尋常中学校の授業割合を見ると、1～3年生には普通体操を週3回行い、4～5年生には兵式体操を週5回割り当てた。成城学校では全学年が週3～5回の兵式体操の授業を受け、5年生はそれに加えて銃剣術も学んだ⁽³⁷⁾。1897年3月に成城学校は予科・尋常科を廃して授業年限5年の尋常中学科を新設した⁽³⁸⁾。

一方、成城学校は1898年7月に清国留学生部を設置した。当時は、川上操六校長が陸軍参謀次長として日清戦争後の対清国関係改善を図っていた時期で⁽³⁹⁾、同政策の一環として清国から留学生を受け入れ、参謀本部内にその事務を担当する清国学生管理委員会を設置した。同委員会の委託を受けて成城学校が清国留学生の教育にあたったわけである。しかし、成城学校最初の外国人留学生は朝鮮人留学生で日清戦争直後のことであった。

1895年11月13日、朝鮮臨時代理公使李台植は、成城学校に成暢基など8名の留学生を委託してきた。彼らはいずれも朝鮮の現役士官で全寮制が義務付けられた⁽⁴¹⁾。朝鮮政府は1896年1月28日にも陸軍士官金商悦と留学生張明根・崔炳台を委託してきたが、留学生2人も士官学校への入学を希

(36) 陸軍との密接な関係は、成城学校が「私立学校生徒数府県別多寡一覧」（1890年）で「士官予備」と科別された点や、1896年8月20日の『東京日日新聞』に「士官学校予備」と記された点などからも明らかである。宮城由美子「成城学校と中国人留学生についての一考察」『佛教大学大学院紀要』第35号、2007年3月、39頁。

(37) 宮城由美子、前掲論文（2007）、38頁。

(38) 『成城学校百年』1985年、42頁。

(39) 徳富蘇峰によれば、当時「川上は初めから露西亜に対するには、先ず支那と親しまねばならぬことを考へ、戦争最中から如何にして支那と親和すべきかに、それぞれ手段を講じてゐた。」日本の大陸政策に深く関わっていたのである。蘇峰徳富猪一郎『我が交遊録』中央公論社、1938年、110頁；宮城由美子、前掲論文（2007）39頁。

(40) 成暢基（1867年生まれ）は1896年7月8日に日本陸軍士官学校に入学するが、召喚命令で帰国して1898年8月17日に陸軍武官学校の教官となった。その後、鎮衛第五連隊第三大隊中隊長（1901.7）と研成学校附（1905.4）を経て陸軍武官学校教官（1905.12）に復帰した。『大韓帝国官僚履歴書』1972年、375・556頁。

(41) 「敬啓者今次 我国陸軍士官成暢基等八人 擬欲赴学貴校仍為寄宿校内該員学科規程應遵定則而至若向後妥議等事本公館当与貴校商辦周全務望 貴校長另佈校内以便修業至為切禱肅此敬具 開国五百四年十一月十三日 大朝鮮臨時代理公使李台植 大日本成城学校長 川上操六 閣下」（下線は引用者）『成城学校百年』1985年、40頁。

望した。⁽⁴²⁾

川上校長が朝鮮人留学生を受け入れたのは、当時の国際情勢より「日韓提携」の強化が必要となったためである。⁽⁴³⁾ 欧米列強の圧力に屈服して遼東半島を清国に返還した三国干渉（1895年4月23日）を経験した日本としては、ロシアに対抗するためにも朝鮮に対する影響力を強める必要があった。しかし、1895年8月20日に発生した閔妃暗殺事件と日本が強制した親日内閣の成立は日朝関係を悪化させた。川上校長が同年11月に朝鮮人留学生を受け入れた背景には、以上のような日本に不利な国際情勢があったのである。

しかるに、俄館播遷（1896.2.11～20）の結果、朝鮮に李範晉の親露内閣が登場し、それまで朝鮮政局を主導してきた親日内閣は崩壊した。同内閣を率いた金弘集・魚允中が民衆により殺害され、兪吉濬・趙義淵なども日本に亡命した。朝鮮内に反日感情が高まり、この影響は成城学校への留学生にも及んだ。1896年2月に委託予定であった留学生6名の派遣が中止となり、既存留学生の中にも退学を希望する者が現れた。⁽⁴⁴⁾

しかるに、以上のような政治的な危機に際しても成城学校の朝鮮人留学生に対する教育は継続された。親露・親米内閣の主導した大韓帝国期（1897.10より）になっても同教育に変化はなかった。1899年現在、成城学校の出身者として将校の資格を取得した者が2人、陸軍士官学校に在学していた者が21人を数えた。そのほとんどが慶應義塾から進学してきた者で、彼らは1898年8月に副校に昇進すると同時に韓国政府の軍部派遣留学生となった。⁽⁴⁵⁾ 1898年10月に成城学校を卒業した学生は同年12月に日本陸軍士官学校に進学した。⁽⁴⁶⁾ 1899年5月8日には、韓国臨時代理公使朴鏞和が成城学校に感謝状を寄せ、さらに12月11日には自ら成城学校を訪問して授業を参観した。しかし、

(42) 「敬啓者今次敝国 士官金商悦留学生張明根崔炳台 願赴 貴校寄宿修業等情摺此仰佈務望貴校長另佈 飭校中該三人仍旧例俾便受業至要切禱肅此敬具 建陽元年一月二十八日 大朝鮮駐劄臨時代理公使李 台植 大日本成城学校長 川上操六 閣下」（下線は引用者）『成城学校百年』1985年、41頁。

(43) 成城学校八十年編纂委員会『成城学校八十年』成城学校、1965年、35頁。

(44) 『成城学校八十年』1965年、35頁。

(45) 甲午改革（1895）の軍制改編により置かれた階級で現在の下士官にあたる。正校、副校、参校の順に旧日本陸軍の曹長、軍曹、伍長にあたる。1907年の軍隊解散によりなくなった。軍部が学費を1899年3月になってはじめて送金したため留学生の生活は不安定なものであった。したがって、駐日公館はいったん他の学部派遣の官費留学生と同じく、日本の銀行から借金して彼らの学費にあててしかなかった。朴賛勝「一八九〇年代後半における官費留学生の渡日留学」『近代交流史と相互認識Ⅰ』（宮嶋博史・金容徳編、慶應義塾大学出版会）、2001年、99頁。

(46) 彼らは、1895年に慶應義塾に派遣された官費留学生151人（4月114人、5月26人、9月7人、11月5人）の一部で、士官候補生第11期生として陸軍士官学校に進学して1899年11月に卒業した。李基東『悲劇の軍人たち——日本陸士出身の歴史』一潮閣、1982年、52頁。官費留学生として陸士（11期生）に進学したのは、金教先、張浩翼、魚潭、金奎福、權承祿、金鴻南、金亨燮、張明根、金寛鉉、金義善、金鴻鎮、權浩善、林在徳、尹致城、金鳳錫、盧景輔（＝盧伯麟）、姜容九、趙宅顯の20人であり、官費ではないが、彼らと一緒に陸士に進学した者は、金成殷、李基鉉、方泳柱の3人であった。朴賛勝、前掲論文（2001）、99頁；李基東、前掲書（1982）、278頁。

日韓両国の関係はなかなか好転せず、結局 1902 年 12 月に第 3 回の卒業生を最後に成城学校における韓国留学生委託教育は廃止されてしまった。⁽⁴⁷⁾

当時、韓国人留学生の陸軍士官学校での修業期間は 1 年で比較的に短かったが、それは成城学校での予備課程を履修したためである。表 4 が示すように、成城学校における韓国人留学生委託教育が廃止される直前（1901 年現在）の成城学校には、韓相龍をはじめとして総勢 39 名の韓国人留学生が在籍していた。⁽⁴⁸⁾

さて、韓相龍は、1899 年 7 月 6 日に成城学校に入学して 1900 年 11 月 25 日に病気により帰国するまで、約 1 年半にわたって在籍した。私塾に入学した 1898 年 9 月 18 日から数えて約 2 年 3 ヶ月の日本留学であった。⁽⁴⁹⁾「此日韓相龍、韓相琦、役所に来訪。同人等は成城学校入学志願に付き、同校長奥山三郎に添書して同人を往訪せしむ」という『宇都宮太郎日記』の記述によれば、宇都宮太郎の紹介による入学であったことが確認できる。⁽⁵⁰⁾朴栄喆・朴斗栄・金應善・韓相琦など 19 人の同級生が全寮制により共同生活をした。韓相龍の回顧録によれば、朴栄喆と朴斗栄は特別班に編入され、韓相龍は金應善・韓相琦とともに日本人班で勉強した。⁽⁵¹⁾1897 年 3 月改正の「文部省指定成城学校規則摘要」を見ると、当時成城学校の教育課程は尋常中学科と高等科に分けられており、前者の授業年限は 5 ヶ年で後者のそれは 1 ヶ年であった。尋常中学科を卒業した生徒に限って高等科への進級が許されたと思われる。高等科は 100 人 1 学級であったのに対し、尋常中学科は約 800 人 5 学級で 1 学級当たりの生徒数は 160 人であった。⁽⁵²⁾すなわち、特別班は陸士予備班である高等科を指しており、韓相龍が 1899 年に 3 年生として編入学したとされる日本人班は尋常中学科にあたることになる。それまで私費留学生であった韓相龍は、1900 年、4 年生に進級する際に官費留学生に選拔され毎月 14 円の支給を受けた。⁽⁵³⁾以下においては、韓相龍が日本留学期間（1898.9～1900.11）中に受けたと思われる思想的影響を検討していきたい。

(47) 『成城学校八十年』1965 年、35～36 頁。1941 年に作成された「成城学校留学生部沿革」には“明治二十八年韓国留学生ノ教育ヲ開始シ、同三十五年二月迄継続セリ”となっていた。『成城学校百年』1985 年、247 頁。

(48) 李基東、前掲書（1982）、144 頁。

(49) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A10112992000「勲四等韓相龍外三名賞勲局總裁宛訓令ノ件」（1924 年 2 月 8 日）。この資料には韓相龍の 1924 年までの履歴書が含まれており、ここでは同履歴書にしたがう。

(50) 宇都宮太郎関係資料研究会『日本陸軍とアジア政策——陸軍大将宇都宮太郎日記』I（以下では『宇都宮太郎日記』と略す）、岩波書店、2007 年、68～69 頁、（1900 年 3 月 17 日）。

(51) 韓翼教編、前掲書（1941）、38 頁。

(52) 『成城学校百年』1985 年、44 頁。

(53) 韓翼教編、前掲書（1941）、38 頁。参考に、1895 年に派遣された慶應義塾の国費留学生には 1 人当たり 15 円の支給があった。

表 4 1901 年現在在籍中の成城学校の朝鮮人留学生（1935 年調べ）

氏名	1935 年現在の職業	住所	日本陸軍士官学校	主要経歴
鄭東淙	未詳	未詳		
崔惠	元警視	京城		
申泰根	死亡	未詳		陸軍砲兵参領（韓）
金競漢	死亡	未詳		
洪承九	死亡	未詳		
金基元	死亡	未詳	士官候補生第 15 期	軍部軍務局教育課長（韓）
洪完植	死亡	未詳		陸軍武官学校教官（韓）
李甲	死亡	未詳	士官候補生第 15 期	陸軍歩兵参領（韓）
李鎮白	未詳	未詳		
韓相龍	朝鮮総督府中枢院参議 朝鮮生命保険会社社長	京城府嘉会洞 178	1900 年 12 月病気 により退学・帰国	東洋拓殖会社理事 漢城銀行専務取締役・ 頭取
李邦協	平安北道元理事官	新義州居住	日本文法研究会明治 法律大学校	漢城裁判所検事試補 宮内府主殿院警務官
徐光世	漢城銀行監査役	京城居住		
金益相	元咸南道評議員	未詳		
朴斗栄	陸軍砲兵大佐関東軍囑託	局子街居住	士官候補生第 15 期	
朴栄喆	朝鮮総督府中枢院参議 朝鮮商業銀行頭取，陸軍少佐	京城府昭格洞 144	士官候補生第 15 期	
張憲根	江原道江陵都守	未詳		
韓相琦	男爵，死亡	未詳		
徐丙轍	死亡	未詳		
趙宗顥	死亡	未詳		陸軍幼年学校教官（韓）
南基昌	死亡	未詳	士官候補生第 15 期	陸軍歩兵参領（韓） ※名簿には「南荃昌」
全永憲	死亡	未詳	士官候補生第 15 期	
鄭瑞鎔	死亡	未詳		
金義善	平北江西郡水利組合長，元郡守	未詳	士官候補生第 11 期	※名簿には「金義善」
金相高	朝鮮総督府中枢院参議	京城府苑南洞 29	士官候補生第 11 期	
張寅根	歩兵少佐	京城府外往十里	士官候補生第 11 期	
趙性根	朝鮮総督府中枢院参議，陸軍中 将	京城府宮井洞 77-1	士官候補生第 8 期	※初名は義範
方泳柱	陸軍少佐	京城府杏林洞	士官候補生第 11 期	
林在徳	陸軍少佐	京城府通義洞	士官候補生第 11 期	
金寛鉉	朝鮮総督府中枢院参議	京城府鐘路 4-142	士官候補生第 11 期	
魚潭	朝鮮総督府中枢院参議，陸軍中 将	京城府外下往十里 569	士官候補生第 11 期	
尹致臧	陸軍中佐	京城府中林洞	士官候補生第 11 期	
李熙斗	死亡	未詳	士官候補生第 8 期	陸軍中将，朝鮮軍司令部 付
金教先	死亡	未詳	士官候補生第 11 期	朝鮮騎兵隊長（韓）

表 4 1901 年現在在籍中の成城学校の朝鮮人留学生（1935 年調べ）（続き）

氏名	1935 年現在の職業	住所	日本陸軍士官学校	主要経歴
金亨燮	死亡	未詳	士官候補生第 11 期	歩兵大佐，朝鮮軍司令部付
趙宅顯	死亡	未詳	士官候補生第 11 期	二等軍司（韓）
權承祿	死亡	未詳	士官候補生第 11 期	砲兵中佐
盧伯麟	死亡	未詳	士官候補生第 11 期	上海独立政府軍務総長
李基鉦	死亡	未詳	士官候補生第 11 期	歩兵大尉
金成殷	死亡	未詳	士官候補生第 11 期	工兵参領（韓）

出典：成城学校校友会『昭和十年版会員名簿』1935 年 7 月，〈朝鮮留学生明治 34 年〉；李基東『悲劇의 軍人들：日本陸軍出身의 歴史』一潮閣，1982 年，〈附録〉；鈴木一「日本陸軍士官学校に留学した大韓帝国学生——その在校の史実」『韓』8（8），（東京）韓国研究院，1979 年 8 月。※（韓）は大韓帝国時代の経歴。

（2）思想的影響

韓相龍に思想的影響を与えたと思われるグループは 2 つあった。1 つは留学初期から韓相龍の指導・監督にあたった宇都宮太郎をはじめとした日本陸軍参謀本部グループであり，もう 1 つは当時日本に亡命していた朴泳孝・安駒壽・趙義淵・兪吉濬・權東鎮などの亡命政客グループであった。李完用・韓昌洙などの海外経験者と官立英語学校という近代教育機関を通じて「文明開化論」に接した韓相龍は，これらのグループとの交流によって「文明開化論」に具体的なイメージを盛り込んだ。とりわけ宇都宮太郎は韓相龍にとって最も大きな存在であった。

幕末期佐賀藩で生まれた宇都宮太郎は，陸軍では「上原派」に分類される反長州閥の中心人物の 1 人であった。⁽⁵⁴⁾「アジア主義」を唱えた人物として有名である宇都宮は，日清戦争の以前から陸軍参謀本部所属として情報畑を歩み，朝鮮と中国に対する多様な工作に取りかかった。宇都宮は，上記したように，外国人留学生の世話役を務め，彼らの「利用価値」を充分認識していた。宇都宮が後に「辛亥革命」を主導した孫文を積極的に支援して，中国を南北二国に分立させようとしたことは

(54) 宇都宮太郎関係資料研究会『宇都宮太郎日記』I，2007 年，「刊行にあたって」1 頁。宇都宮の履歴について簡単に触れておく。1861 年佐賀藩士亀川新八の長男として生まれる。その後父の切腹により亀川家断絶，宇都宮泰玄の弟となる，1885 年（少尉）陸軍士官学校を首席卒業（旧 7 期），1890 年（中尉）陸軍大学校を優等卒業（6 期），1892 年参謀本部出仕，1894 年（大尉）大本営陸軍参謀，1901 年（少佐・中佐）英国公使館附武官，1905 年（大佐）参謀本部附，1906 年陸軍大学校兵学教官兼同校幹事，1907 年歩兵第 1 連隊長，1908 年参謀本部第 2 部長，1911 年（少将）東宮御用掛，1914 年（中将）第 7 師団長（旭川），1916 年第 4 師団長（大阪），1918 年朝鮮軍司令官，1920 年（大将）軍事参謀官，1922 年胃癌のため死去（60 歳）。「刊行にあたって」1～2 頁。

(55) 「上原派」が重要視したのが「参謀本部の強化」であったことは周知のことであろう。北岡伸一『日本陸軍と大陸政策』東京大学出版会，2009 年，75 頁。1896 年の参謀本部条例で参謀本部はこれまでの局制を廃止し，部制をとった。副官部，第 1 部から第 4 部までと編纂部という構成となった。1899 年の改正では副官部は総務部，編纂部は第 5 部と改められた。そのうち第 2 部が情報と地理を担当していたが，宇都宮は 1908 年に第 2 部長になる。大江志乃夫『日本の参謀本部』中央公論社，1985 年，60～61 頁。

周知のことである。⁽⁵⁶⁾ そうした工作はほとんどがロシアの南下政策への対策で、そのためにもロシアの進出対象である満洲及び朝鮮における各種情報の収集活動と「隣邦」中国に対する工作を重要視した。⁽⁵⁷⁾ そのために 1893 年の条例改正で国外に派遣されている公使館附武官を参謀本部の管轄のもとに置いた。公使館附武官は参謀本部が国外にのばした情報網の先端であった。⁽⁵⁸⁾ そうした意味で韓相龍が帰国して駐韓日本公使館附武官野津鎮武と親密な関係を持ち続けた事実は示唆するところが多い。野津も参謀本部所属として日露戦争中まで長く公使館附武官を務め、さらに宇都宮と「相識の間柄」であった。⁽⁵⁹⁾ すなわち、韓相龍など韓国人留学生に対する宇都宮の保護・監督・指導が、駐韓日本公使館附野津の利用に移ったことになる。

宇都宮は成城学校の留学生部の設置にも関わった。宇都宮は、1897 年に湖広総督張之洞と会見した際に、張総督に日本人軍事顧問の採用とともに士官学校への留学生派遣を勧誘した。ロシアをはじめとする白人種の東進に対抗するためには日本の援助に頼って清国の軍事力を向上させる必要があると力説した。⁽⁶⁰⁾ 彼らの留学生をいかに利用するかによって、東アジアにおける日本の国権拡張の結果が大きく左右される可能性に注目したわけである。実際に日本に留学していた多くの中国人留学生が孫文の「中国同盟会」に参加し、後に「辛亥革命」に積極的に参加したことは周知のことで、その背景に彼らの革命勢力を支援した宇都宮・宮崎滔天など多くの日本人がいたこともよく知られている。⁽⁶¹⁾ 韓国人留学生に対する政策も同様であった。「馬山浦事件」が発生した際にも宇都宮は韓国人留学生に同情を示しながらロシアに対する警戒心を植え付けた。優秀な韓国人留学生が宇都宮のところを頻繁に訪れ指導を受けていた。次の引用文がそうした事情をリアルに示す。

「目下留学の韓国学生中将来の見込めるもの（或る事を為す為めに）、盧伯麟、李基鉦、金寛鉉、金義善、権承録、韓相龍等なるべし。他にもこれあらんも、余の用を為さしめ得るは目下の処にては此数人を出す。此数人ととも未だ尽く我が思ふ様に動くや否やは未だ確実ならず、稍や望ありと云ふに過ぎず。」⁽⁶²⁾

すなわち、宇都宮は盧伯麟・李基鉦・金寛鉉・金義善・権承録・韓相龍など 6 人の韓国人留学生

(56) 桜井良樹によれば、「宇都宮は、参謀本部による革命派援助と南北操縦策の中心的人物として注目されてきた。そしてそれは、日本政府の清朝維持を基調とする政策と対立するものだとされてきた」。

『近きに在りて——近現代中国をめぐる討論のひろば』第 47 号、2005 年、5～10 頁。

(57) 大江志乃夫、前掲書（1985）、37 頁。

(58) 大江志乃夫、前掲書（1985）、60 頁。

(59) 『宇都宮太郎日記』III、2007 年、141 頁、〈1918 年 8 月 25 日〉。

(60) 斎藤聖二「明治期の宇都宮太郎——駐英武官・連隊長・参謀本部第二部長」『宇都宮太郎日記』1、2007 年、7 頁。

(61) 並木頼寿・井上裕正『世界の歴史 19——中国帝国の危機』中央公論社、2008 年、344～356 頁；第 10 章。

(62) 『宇都宮太郎日記』I、2007 年、82 頁、〈1900 年 5 月 21 日〉。

に注目しており、自分の思う通りに利用できるかの確信はないが、彼らを「余の用を為さしめ得る」ように育てていこうとしたことがわかる。⁽⁶³⁾したがって、韓相龍など成城学校の韓国人留学生の思想を検討するためには、宇都宮の思想的なバックグラウンドを探る必要がある。

当時日本の陸軍には対外膨張を主張する国権主義者が多く存在しており、宇都宮も基本的には国権主義を対外姿勢として受容した。しかし、宇都宮は陸軍の国権主義にとどまらない「アジア主義」志向を有していた。宇都宮のアジア主義と関連して『宇都宮太郎日記』1900年5月18日の計画案は実に興味深い。当時宇都宮は次期英国公使館附武官に内定されていた。英国に派遣されるにあたってそれまで歩んできた軍人としての過去を顧み、今後の英国赴任を自分の人生の中でどう位置づけるかを考えた文章である。長文ではあるが、宇都宮の思想と関連して示唆する点が多いため、次に引用しておく。

「一旦韓に帰化し、内部より韓国を開発誘導して身を以て日韓の連鎖となり、韓国を日本に引寄（合併、連邦、同盟何れにても漸次歩を進むるにあり。二十九年の清韓旅行復命書の目的）すること、第一には帝国を強大にし、第二には韓民を救ひ、第三には亜細亜連邦の基礎として今日志士の為すべき一事業にはあらざる乎、熟考を要す。何れにして〔も〕今一層余が実力を練ること肝要なり。これが為めに宗教、哲学を研究し、一応欧州に遊び、其大勢を察し達人に接し来ることは此案実行の為めにも目下の余の所置としては得策たるべき乎。愈々此案を実行するとすれば、凡そ左の如くするを希望す。一、今年中に出発、欧州にて約三ヶ年間研究すること。二、帰朝后約一ヶ年間日本にて研究し、且つ交友を求むること。三、公使館附若くは其他の名儀〔義〕を以て、二、三年間京城に駐劄し、若くは内地の旅行を為し度きこと。四、此間を以て韓国を研究し、其人士に交はり、帰化及帰化後の計を為すこと。五、帰化後は帝国の利害に衝突せざる限り韓国の国利民福を計り、漸を以て日韓の合同を謀ること。この事業は、吾人が希望せるが如く日露決戦を交へ、我にして利用を得れば一見徒労に属するの感なきにあらず。然れども此場合には其成功の凡人の眼に赫々たらざるのみにして、将来韓国の統治上其冥々の効果は必ず偉大なるものこれあるべきを信す。⁽⁶⁵⁾」

(63) 宇都宮と彼の部下であった相良憲太は、利用価値がない留学生の場合は帰国させるに躊躇しなかった。洪承九のケースがそうであった。「相良の用向は洪承九帰国を願ひ止まざるに付き如何せんかのことに付き、病氣と云ひ、人物も見込無き故帰しむべし、尤も一応其父兄に其趣を通じ、彼等に承知せしめて後にすべしと答ふ。」『宇都宮太郎日記』I、2007年、84頁、〈1900年6月3日〉。

(64) 国権論・国権主義は国家権力の対外的独立と確立を主張する理論である。明治期、不平等条約の改正などをめざして、民権論と関連しつつ主張された。日清戦争後は国家の対外的拡張に重点が移り、国家主義・日本主義へと傾斜していった。より詳細な内容については、趙軍『大アジア主義と中国』亜紀書房、1997年。

(65) 『宇都宮太郎日記』I、2007年、81頁、〈1900年5月18日〉。

要するに、1900年当時の宇都宮の計画案は、3年ほどヨーロッパで研鑽を積み、帰国後に日本で1年間基礎を固めた上で2～3年ソウルに駐在し、その後韓国に帰化するものであった。さらに、宇都宮は、身をもって日韓の連鎖となり、韓国の内部から日韓一体化を推し進めて日本の国力増強と韓国民の救済を果たし、その後のアジア連邦樹立の礎になると記している。宇都宮は、自分の希望する日露戦争が勃発すれば、上記のような努力が無益な苦勞になってしまうが、そうだとでもそれ以降の韓国統治に資するはずだとしている。⁽⁶⁶⁾すなわち、宇都宮が軍職を犠牲にしても実現させようとしたアジア主義は、日清戦争後対外膨張に傾斜していた国権主義から始まっており、ロシアに対抗するための日本を盟主とするアジア連帯論にはかならなかった。成城学校に在学していた時期の韓相龍が、中国人留学生に呼びかけてシベリヤ鉄道の全通から予想されるロシアの南下に東アジア三国がどう対応すべきかを討論したのも、宇都宮の影響によるものであった。⁽⁶⁷⁾すなわち、韓国の支配権をめぐる日露間の角逐という状況において、韓相龍は宇都宮のアジア主義に傾いていたのである。⁽⁶⁸⁾

「成城学校在学中には、何時も寄宿舎で九時の消燈時間がすぎると、私はランプを点けて鮮人留学生、進んでは支那人留学生数名も呼集めて地圖を圍み、今後シベリヤ鉄道が全通したなら東洋の情勢も一變するに違ひない、吾々はこの事をよく考へておかなければならないなどと語り合つたのであります。ある時は斎藤生徒監に見付けられ、叱られたこともあつたのであります。」⁽⁶⁹⁾

(66) 斎藤聖二、前掲論文（2007）、10頁。

(67) こうした考え方は、日清戦争とその直後に三国干渉などがあつたから急に生まれてきたなどというものではない。日清戦争前からロシアのシベリヤ鉄道の建設が東アジアの情勢に決定的影響を及ぼすという認識を基礎に、軍備拡充の急務が意識されていた。それは日本の近代軍隊と軍国主義制創設の中心人物、山県有朋の「軍事意見書」（1888年、明治21年）、「外交政略論」（1890年、明治23年）、「軍備拡充意見書」（1895年、明治28年）など、一連の意見書を見れば明らかである。井口和起「日露戦争」井口和起編『近代日本の軌跡3 日清・日露戦争』吉川弘文館、1994年、75～76頁。一方、日清戦争時、第1軍司令官として中国（満州）の九連城にあつた山県有朋は、釜山からソウルを経て義州に至る鉄道建設の必要を天皇に建言したことがある。1894年11月7日の「朝鮮政策上奏」でこう述べている。「夫レ釜山・義州ノ道路ハ、即チ東亞大陸ニ通ズルノ大道ニシテ、後來、支那ヲ横断シテ直チニ印度ニ達スルノ道路トナル可キハ毫モ疑ヲ容レザルノミナラズ、我ガ邦ニシテ覇ヲ東洋ニ振ヒ、永ク列国ノ間ニ雄視セント欲セバ、亦須ラク此ノ道ヲ以テ直チニ印度ニ通ズルノ大道ト為サザル可カラザルハ、臣ガ確信シテ疑ハザル所ナリ」と。朝鮮縦貫鉄道の建設は、中国大陆を経てインドに至る東アジア征覇の鍵である、というのである。山県が地図に描いた鉄道によるアジア侵略の夢は、早くも日清戦争とともに着手された。開戦直後の1894年10月、日本は朝鮮政府に迫って「日鮮暫定合同條款」でソウル―釜山間、ソウル―仁川間の軍用鉄道の建設を認めさせた。ソウル―釜山間の鉄道建設は容易に進まなかったが、日露開戦後の1905年、京釜鉄道・京義鉄道が開業し、植民地支配の先兵としての朝鮮縦貫幹線を完成させた。海野福寿『日清・日露戦争』集英社、1992年、140～141頁。

(68) アジア主義については、朴英宰「近代日本のアジア認識——脱アジア主義とアジア主義」『露日戦争前後日本の韓国侵略』一潮閣、1995年、109～134頁（韓国語）；国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第1巻、吉川弘文館、1979年、154頁；竹内好編『アジア主義』筑摩書房、1963年など。

一方、当時の日本には激動する韓国の政治状況を反映して多くの亡命政客が来日していた。彼らとの交流も韓末日本留学生の思想的影響を論じるにあたり検討すべき経路である。⁽⁷⁰⁾ 韓相龍が留学していた時期にも朴泳孝・安駟壽・趙義淵・兪吉濬・鄭蘭教・権滢鎮・権東鎮・尹致昨などが亡命していた。⁽⁷¹⁾ 彼らの多くが日本をモデルとした急進的な近代化を試み、その中には日本の軍事力を借りて政権を掌握しようとした人物もいた。朴泳孝（1861～1939）は金玉均とともに 1884 年の甲申政変を主導して日本に亡命したことがあるが、1900 年当時も 1896 年の高宗廃位運動の失敗により日本に亡命していた。安駟壽（1853～1900）は急進開化派官僚の 1 人として独立協会の会長（1896.7～1898.2）を務めた人物で、朴泳孝と同じく 1896 年 6 月の高宗廃位運動を主導した。⁽⁷²⁾ 韓国最初の米
国留学生兪吉濬（1856～1914）は、欧米旅行の経験の内容とした『西遊見聞』を執筆して韓末の思想界に大きな影響を与えた人物で、開化派という政治的な理由で 1896 年日本に亡命した。韓相龍は特に兪吉濬と交流が深く帰国後も親交を続けた。兪吉濬が早くから福澤諭吉の指導を受けていたことを考慮すれば、⁽⁷³⁾ 韓相龍が兪吉濬を通じて福澤の文明開化論に接していたと推察できる。⁽⁷⁴⁾ すなわち、日本留学当時の韓相龍は主に急進開化派官僚出身の亡命者に会って親交を結んだが、彼らの政治的志向は日本をモデルにした政治改革を試み、日本の支援を求めていたという共通点を持つ。韓相龍の親日化は思想的な影響からも人的交流からも自然な成り行きであった。

3. 帰国と官歴——日本公使館の留学生利用

韓相龍が帰国した頃の駐韓日本公使館には、林権助公使をはじめ萩原守一書記官、塩川一太郎通訳官、日本公使館附武官野津鎮武などが勤務していた。韓相龍は宇都宮の勧誘にしたがって彼らとの交流を続けた。特に、野津は宇都宮の親友で宇都宮と同じく参謀本部所属であった。韓相龍のよ

(69) 韓翼教編，前掲書（1941），51 頁。

(70) このような経験は魚潭や李甲などの回顧録にも見られるので、当時留学生たちには共通した経験であったと思われる。朱耀翰『秋汀李甲』大成文化社，1964 年（韓国語）。

(71) 韓翼教編，前掲書（1941 年），38 頁。

(72) 安駟壽は 1900 年帰国して処刑された。安駟壽に対しては、宋京垣「韓末安駟壽の政治活動と対外認識」『韓国思想史学』8，1997 年（韓国語）。

(73) これらの亡命客と福澤諭吉との関係については、具仙姫「福澤諭吉と 1880 年代韓国開化運動」『史叢』32，1987 年；金旼奎「福澤諭吉と朝鮮開化派——彼の対朝鮮観と開化派に対する援助を中心に（1885 年初まで）」『実学思想研究』2，1991 年；金思燁「金玉均の生涯と福澤諭吉」『比較文学』16，1991 年（以上韓国語）；高城幸一「福澤諭吉と甲申政変——『時事新報』朝鮮関連社説を中心に」『日本学報』51，2002 年など。

(74) 具仙姫，前掲論文（1987），40～49 頁；趙恒來編著『日帝の対韓侵略政策史研究——日帝侵略要人を中心に』玄音社，1996 年（韓国語），116～151 頁。

うな利用価値のある帰国留学生は野津の管轄下に置かれた。

萩原守一は1895年から1896年まで仁川港代理領事を務めたことのある外交官であり、1896年からはドイツで勤務した。萩原はドイツに向かう直前の1896年11月に『国民的対韓策』という小冊子を著した。萩原は同書の中で、日清戦争・閔妃暗殺事件後広がっていた韓国民の反日感情とロシア勢力の浮上により行き詰まっていた対韓政策を、日韓国民同士の関係改善を通じて解決すべきであると主張した。その具体的な方法として「第一、宗教及慈善ノ業務ヲ奨励スル可シ第二、隊商ヲ組織シ我商民殊ニ行商ヲシテ危険ヲ自衛スルノ道ヲ講ス可シ第三、普ク仁慈事業ヲ奨励シテ我国粹ノ注入ヲ圖ル可シノ三種ニアリ」と言及し「未開ナル朝鮮人ノ視察」を強調した。⁽⁷⁵⁾ そうすると、結局「間接ニ政府対韓策ノ運行ニ向テ便宜ナル素地ヲ布ク」ことになると期待した。⁽⁷⁶⁾ 仁川港代理領事萩原が、武装隊商組織形態の鶏林奨業団に対する認可を与えたのも、駐韓日本公使館の反対を押し切って仁川米豆取引所の設立認可を下したのも、以上のような対韓認識によるものであった。⁽⁷⁷⁾ 1901年に公使館書記官として再び在韓勤務を命じられた萩原は、1901年10月に小村寿太郎外相の指示にしたがいフランス公使館のルフエブル（G. Lefebvre）書記官と京義鉄道に関する日本の建設資金支援方針を伝えるなどの実務にあたっており、⁽⁷⁸⁾ 1902年からは林権助公使の不在中臨時代理公使として日本公使館の責任を負っていた。⁽⁷⁹⁾

1895年当時在朝鮮京城日本公使館書記生であった塩川一太郎も『朝鮮通商事情』という本を著して「日本産貨物販売ノ拡張ヲ勉ムル事」を論じた。そこで塩川は過去10年間の朝鮮在住の経験から日本商品の販売を促進する具体的な方法として、次のように述べている。

「余ハ先キニ当国ニ於ケル幾般工業ノ現況一般ヲ述ヘリ以上諸品カ当国ニ需用アリテ年々其額ヲ増進スル所以ノ者職トシテ当国工業社会ノ状況ニ起因セスンハアラス就中模造品ノ近時漸ク其種類ヲ増加セシカ如キ者最も然リトス抑金巾類ノ販売近來漸ク清国商估ノ手ニ期スルハ即チ朝鮮ニ於ケル日本ノ商權ヲ失墜スル訳柄ナレハ其回復ハ素ヨリ吾人ノ企図シレ措カサル所ナリトハ雖トモ之ト同時ニ最モ注意ヲ要スルハ実ニ日本産雜貨ノ販路ヲ拡張スルニアリ目下ノ現況ニ依ルトキハ日本産雜貨ノ販売額ハ素ヨリ金巾類ト比敵スヘキ者ナク又素ヨリ多クノ金額ニ上

(75) 萩原守一『国民的対韓策』1896年、1～2頁。

(76) 萩原守一、前掲書（1896）、8～9頁。9～22頁には、3つの方法が詳細に述べられている。

(77) 萩原守一、前掲書（1896）、3～4頁。

(78) 韓哲昊「鶏林奨業団（1896-1898）의 組織과 活動」『史学研究』第55・56合集号、1998年、632～633頁。

(79) 『朝鮮新聞』1931.8.25、仁取盛衰記（7）〈市場紛擾で解散命令〉。

(80) 金元洙「日本の京義鉄道敷設権獲得企図と龍岩浦事件——露・日開戦と関連して」『韓日関係史研究』第9集、韓日関係史学会、1998年、55頁。

(81) 中田孝之助『在韓人士名鑑』木浦新聞社、1905年、51頁。日露戦争後の1906年には奉天総領事を、のちに外務省通商局長を務めた。<http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/163.html>。

ラサルモ其販路ノ拡張否ニ付テハ本邦生産業上ニ関スル所大ナル事はナリ⁽⁸²⁾」

すなわち、塩川は清国商人の市場蚕食による日本商権の失墜を回復する方法として、日本産雑貨の販路を拡張することを主張したのである。塩川も萩原と同じく朝鮮における日本勢力の後退の傾向を恐れて、特に経済的な側面からの対策を提示したわけである。要するに、韓相龍が日本公使館に出入りしていた時期は、萩原と塩川2人とも朝鮮における日本勢力の拡張に腐心していた時期でもあったのである。

一方、韓相龍は日本守備大将を務めていた日本公使館附武官野津鎮武少佐とも親交を持ち彼の指導を受けていた。野津少佐は名門出身でかつて西欧に留学したことがあり、宇都宮と同じく参謀本部所属で「相識の間柄」⁽⁸³⁾であった。したがって日本で宇都宮の世話を受けた韓相龍が野津少佐と親密な関係を形成していたのは無理な設定ではない。特に、韓相龍が後述する1903年の公立漢城銀行の発足工作に李載完の通訳として活躍することによって、両者の交流は一層深まることになる。当時野津少佐は韓国におけるロシア勢力の駆逐に腐心しており、アジアにおける日本の盟主としての役割を期待していた韓相龍も「露国ノ勢力ヲ根本的ニ朝鮮カラ駆逐シテミセル」⁽⁸⁴⁾という彼の「東洋に対する持論を興味深く拝聴」⁽⁸⁵⁾した。野津少佐は高宗の厚い信頼を得ており、中佐に昇進した1904年3月からは韓国軍部の顧問官を務めた⁽⁸⁶⁾。野津は、韓国政界の黒幕として高宗の従兄弟李載完とも深い親交を持ち、韓国政界に相当な影響力を発揮していたのである。

野津と李載完との出会いは、1901年に「朝鮮視察ヲ名目トシテ此紛糾シテ居ル日韓ノ国交ヲ円満親善ナラシムル為ニ」朝鮮を訪問した近衛篤磨⁽⁸⁷⁾（1863～1904）が韓国皇室の李載完・李址鎔との非公式的会談を求め、これを野津少佐が斡旋したことがきっかけであった⁽⁸⁸⁾。それ以来、野津少佐は李載完をカウンター・パートナーとしてロシア勢力の駆逐のためにさまざまな工作に取り組んだ。京

(82) 塩川一太郎『朝鮮通商事情』八尾書店、1895年、2～3頁。

(83) 野津は1918年に朝鮮守備を目的として1915年12月に創設された第19師団の第2代師団長に就任した高島友武中将の実兄にあたる。『宇都宮太郎日記』I、2007年、141頁、〈1918年8月25日〉。

(84) 西四辻公堯編、前掲書（1930）、15頁。

(85) 韓翼教編、前掲書（1941）、51頁。

(86) 「又近衛公ハ野津氏ヲ紹介シテ“日本ノ名門ノ出デアルバカリデナク嘗テ欧洲ニモ留学シタ事ガアツテ少佐軍人中ノ俊髦デ其人格モ亦私ガ保証スルカラ今後ハ折角御愛顧ヲ願ヒタイ”、李氏ハ“イヤ私コソ宜敷ク”ト野津氏ニ挨拶シテオイテ……」西四辻公堯編、前掲書（1930）、38頁。野津鎮武は1906年軍部顧問官としての功を認められて勳二等に追叙され八卦章を受けた。『皇城新聞』1906.5.21、〈顧問叙勲〉。

(87) 近衛篤磨は、ロシアの南下政策に対して対露強硬運動を主導的に展開した人物であった。彼は、第一次桂内閣の成立により対露強硬路線の国民同盟会運動が進まなくなると、その代案として1902年3月に「朝鮮扶掖」策を標榜する「朝鮮協会」を結成した。1901年の韓国訪問はこれと関係があると思われる。波多野勝「朝鮮協会の基礎的研究——国民同盟会運動のその後」、『政治経済史学』187、1981年12月）。

(88) 西四辻公堯編、前掲書（1930）、30頁。

義鉄道敷設権獲得運動の阻止工作⁽⁸⁹⁾と平式院借款供与工作が代表的である。

1902年8月に韓相龍は、帰国後しばらく担当していた中橋義塾の英語教師を辞め、宮内府平式院の総務課長（在任 1902.8.24～1903.7.18）に任命された。平式院は、開港以後外国との通商が増加するにしたがって度量衡法・度量衡器の整備及び取締りを目的として設置された機構であった。平式院の設置は日本の勧誘にしたがう形で行われたが、実際には日韓貿易と日本商人の商業活動を拡大させる目的で日本度量衡制度の導入を進めたことになる。平式院の設立と「度量衡の釐正」が実施されるまで、林権助公使及び度量衡製作技師井上宜文の執拗な建議と公使館を通じた圧力があつた。韓国度量衡制度の実態調査を依頼された工学士笠井愛次郎⁽⁹¹⁾は、その調査報告書として『韓国度量衡法制定案説明書』を作成した。上記の井上宜文は、1902年10月に平式院技師として平式院に入り、主に龍山度量衡製造所の監督を務めた⁽⁹²⁾。

韓相龍を平式院の総務課長に抜擢したのは宮内部大臣李載完であつた。李載完が平式院の総裁を兼職することになって、信頼を置いていた韓相龍を推薦したのである。李載完が韓相龍に注目し始

(89) 金元洙，前掲論文（1998），66頁。

(90) 1896年に閔泳綺が近代教育を標榜して設立した。特権階級の子弟を対象にして外国語，特に日本語・英語・漢文教育に重点を置いた近代教育機関であつたが，1906年に廃校された。金泳謨，前掲書（1972），148頁；孫仁銖『韓国近代民族教育の理念研究』文音社，1983年。

(91) 『駐韓日本公使館記録』16，国史編纂委員会，1996年，189～193頁。度量衡制度改正・統一と平式院設置のための交渉過程については，西四辻公堯編，前掲書（1930），65～69頁に詳しい。

(92) 笠井愛次郎（1857年生まれ）は1882年に工部大学校土木学科を卒業し，徳島県庁に出仕して南海四県国道貫通の工事を担当した。また海軍鎮守府を佐世保及び呉に創設するにあたり抜擢され同工事に従事した。九州鉄道会社に招聘され創立諸般の処理に関わった笠井は，その後日本土木会社に入り大阪支店長となった。1892年に朝鮮を経由してシベリヤを視察し，帰国して1894年にセメント会社を創立しその社長を務めた。同年日本ゴム製造法を発明した。1897年に鉄道学校を設立し鉄道従業員の育成に力を入れ，1898年には鉄道協会を創立した。1900年に京釜鉄道会社技術長となり朝鮮における京城・釜山間の鉄道敷設に大きく貢献した。1909年には利根発電会社社長となってその水力事業を完成した。1925年に工学博士の学位を取得した。『日本産業人名資料事典 II』第1巻，日本図書センター，2002年（原本は，中西利八編『財界フースヒー』通俗経済社，1931年，第3版），カの部40頁。

(93) 国史編纂委員会編『駐韓日本公使館記録』16，1996年，189～193頁。井上宜文は，1868年11月に東京府士族井上武敬の長男として生まれた。井上は，1893年に鉄道車輛製造業を開始し，1895年には第4回勸業博覧会審査官に任ぜられた。1898年に業を廃した井上は，その翌年（1899年）韓国に渡り，韓国度量衡制度の不統一なるのを慨し建議してその改正事業を完成した。その後，韓国の兵器廠を設置してその経営にも関わったが，韓国併合と同時にその経営を辞し1911年12月まで欧州視察を行った。朝鮮にもどった1911年12月より朝鮮総督府の特許を得て人參製菓を開業した。最初は東京に井上薬品部（資本金5万円）として設立したが，1922年6月に本店を移転して鍾路通に開設し翌年7月に商号も井上宜壽堂（合資，20万円）と改称した。中村資良編『朝鮮銀行会社要録』1923年版，57頁。また井上宜文は1917年に忠清北道忠州郡邑内面所在の735,300坪に達する鉄鉾の鉾業権の許可を得ており，広大な農園も経営した。『朝鮮総督府官報』1917.3.9；『日本産業人名資料事典 II』第1巻，イの部32頁。

めたのは、李載完が1901年9月21日に釜山草梁で行われた京釜鉄道南部起工式に特命使として参席し、韓相龍が李載完の通訳を務めて以来であった。⁽⁹⁴⁾ 李容翊とともに高宗の最側近であった李載完は、日本との交渉が多かった当時、日本語のできる実務型秘書として韓相龍のような存在が必要であった。⁽⁹⁵⁾ 平式院の借款交渉がその一例であった。平式院は度量衡制度の改定に要る資金を、第一銀行から借款の形で借り入れることにした。同借款交渉の調印担当者は平式院総務課長韓相龍と第一銀行京城支店支配人高木正義であった。⁽⁹⁶⁾ 非公式的なルートから生まれた借款交渉であったため、李載完が前面に出ることを嫌がったのである。⁽⁹⁷⁾

このように当時日韓の交渉は、公式会談とともに裏面工作が頻繁に行われた。野津少佐にとっての魚潭のように、李載完にとって韓相龍は、通訳としても代わりの契約担当者としても重要な役割を果たした。魚潭と韓相龍はともに日本の成城学校に留学したことのある先輩と後輩の関係であった。韓相龍と魚潭に対する日本公使館の援助と保護は、成城学校留学時の宇都宮の留学生利用方針と密接な関係を持つ。日露戦争が勃発した際にも、京城居住日本人の保護にあたった野津守備隊長は、危険にさらされる「親日派」韓相龍一家に保護便宜を与えるため証明書（門鑑）を発行した。⁽⁹⁸⁾ 次の引用文に登場する野津のリアルなことばからも、日本公使館の留学生利用政策の実態を読み取ることができよう。

「そのことがあつてから十日程すぎ野津少佐に呼ばれて行くと、野津少佐は私に対し『君に頼みたいことがある。日本軍が北進するにつれて誰か北方に居て便宜を計^{ママ}つて頂きたいが、そのために是非君に義州府尹になつてもらへまいか』と云ふことでありましたが私はこれに應じませんでした。それを義州府尹が役不足であるとか任地が遠方であるとか云ふ理由から私が断つたのかと野津少佐はお考へになつたのでありませう。『それでは平壤府尹はどうか』『それでは漢城府尹はどうか』と云ふ話でありましたが私はとうとうこの申出でを断つてしまひました。』⁽⁹⁹⁾

すなわち、日露戦争以前より京義鉄道の終着点義州をめぐる日露間の激しい外交攻防戦が展開さ

(94) 韓翼教編，前掲書（1941），43～44頁。

(95) 李載完は1855年生まれで高宗の従弟にあたる。1875年科挙試験（文科）に及第して1877年副承旨から吏曹参判（1880）、弘文館提学（1886）、吏曹判書（1891）、宮内部大臣（1899）などを務め、1899年9月に完順君の爵位を受けて正一品に就いた。大村友之丞，前掲書（1910），35頁。

(96) 平式院は第一銀行京城支店から1902年8月と1903年3月の2回にわたって25万円の借款を導入した。長谷井千代松編『第一銀行五十年小史』（第一銀行，1926年），87頁；韓翼教編，前掲書（1941），49頁。

(97) 平式院貸上金の契約証書には「今般大韓国平式院総務課長韓相龍ハ本院ニ於テ度量衡器製造事業ニ要スル資金ヲ大日本国株式会社第一銀行ヨリ借用ノ事ヲ左ノ条項ニ依リ契約ス（以下省略）」となっている。第一銀行編『韓国ニ於ケル第一銀行』1908年，166～167頁。

(98) 韓翼教編，前掲書（1941），63頁。

(99) 韓翼教編，前掲書（1941），64頁。

れていたこともあって、⁽¹⁰⁰⁾日本公使館は日本軍に協力してくれる親日勢力を戦略的主要拠点に扶植しようとしたのである。

おわりに

以上をもって、植民地期における朝鮮財界の重鎮として「朝鮮の洪沢栄一」とも呼ばれた韓相龍の日本留学及び帰国直後の活動を通じて成城学校の韓国人留学生がどのような思想的影響を受け、1900年前後の激しい政治変動の中でどのような活躍を見せたかを検討してきた。本文での立論によれば、韓相龍の日本留学をささえ帰国後の親日的な活動に思想的な根拠を与えたのは、日本陸軍参謀本部の宇都宮太郎の保護・監督と彼の有していた「日本を盟主とするアジア主義」であった。

まず、韓相龍は、大韓帝国期の韓国で自称「文明開化論者」韓昌洙の影響と官立英語学校での修学を通じて、日本・欧米の近代化経験に接することができた。近代化をめぐるさまざまな勢力が自分の政治的・経済的基盤に立って対立と葛藤を繰り返している中で、名門出身の韓相龍は文明開化に対する漠然としたイメージだけで留学に就いた。1898年7月から1900年11月までの日本留学、とりわけ「士官予備校」成城学校での生活は、文明開化論という器に参謀本部の宇都宮太郎のアジア主義・アジア連帯論・日本盟主論などの具体的なイメージを盛り込む契機を与えた。それに日本に亡命していた朴泳孝・安駟壽・趙義淵・兪吉濬・権東鎮など急進開化派との交流からも、思想的な影響を受けた。そうした経験により、韓相龍は日本をモデルにした近代化を願望することになった。

帰国してからも林権助公使・萩原守一書記官・塩川一太郎通訳官など、駐韓日本公使館員及び公使館附武官野津鎮武との交流を続けた。朝鮮政府の軍事顧問になる野津が参謀本部所属で宇都宮の親友であった点、参謀本部が留学生政策に関わっていた点、1903年頃は朝鮮支配権をめぐる日露の角逐が激しくなった点などを考慮すれば、韓相龍・魚潭など日本留学生出身を一朝有事の際に活用できる親日勢力として育成することは重要であった。野津が韓相龍を義州府尹に就くように勧め、対ロシア政策の尖兵として利用しようとした事例からも、日本留学時の保護・監督や日本公使館による帰国留学生の管理が親日勢力育成政策であったことは明瞭である。韓相龍が1910年の「日韓併合」を素直に受け入れ、植民地期に入ってから日本の朝鮮支配政策に積極的に協力し得た思想的根源は、すでに韓相龍の日本留学時代に形成されていたのである。

(経済学部助教)

(100) 義州は、ロシアの安奉鉄道の終着地である安東と国境を介して面していたため日露両国の鉄道計画の衝突点であり、また日本がロシアの龍岩浦租借に對抗して開市を要求した地域でもあった。したがって、義州をめぐる日露間の外交攻防には鉄道利権以上の問題が絡み合っていたといえよう。金元洙、前掲論文(1998)、54頁。